



美術の窓(73)

開館40周年を迎えて

大和文華館館長 水田 徹

近畿日本鉄道創立50周年事業として設立された大和文華館が、記念すべき西暦二千年の今年、開館40周年を迎えます。これもひとえに関係の皆様方の日頃のご厚情とご支援の賜物であり、まずはここに心より御礼申し上げます。

折りしも今年是我が国に文化財保護法が制定されて50年目にあたります。これを記念し東京国立博物館では「日本国宝展」が開催され、我が大和文華館も4月から秋にかけて4回に亘り記念名品展を催します。これを機会に、大和文華館設立に向けて当時の近鉄社長種田虎雄氏と初代館長矢代幸雄氏が語り合った夢と理想をいささか顧み、40周年記念のご挨拶と致します。

美術館開館に先立つ昭和26年、美術雑誌『大和文華』の創刊号に寄せた〈種田虎雄さんと大和文華館〉という一文の中で、矢代幸雄氏は「大和文華館というものは、私の案というよりもむしろ種田さんの案、少なくとも、種田さんが充分考えて賛成した、と言うべきであります」と前置きした上、「いま種田さんと私が、夢のように、大和文華館の将来を話し合ったところは、大略以下のようなものであります」として、次の3点を挙げております。

第一に、「大和文華館は民間の事

業らしく、自由清新な空気に満ちた、楽しい、要領のよいところにしてゆきたい」とし、「民間事業のプライドを以って、個性のはっきりした貢献を社会および世界に対して行おう……。更に具体的に言えば、奈良には国立博物館があり、また大和の国宝保存事業や考古学の事業などの国家的事業も行われている。これと重複しないように心掛けて、その方面の補充の役も果たし、更にまた、国家事業に洩れた新鮮なる別天地を開きたい」というわけです。今日でこそ民間主導、地方分権といった言葉は日常茶飯に語られるようになりましたが、種田・矢代コンビはそれを半世紀も先取って論じていたということになります。

二人が美術館設立の基本理念として挙げた第二点は、大和文華館は美術および工芸を主たる事業対象にするということでした。「大和を中心として開発すべき文化は、考古学も歴史も、宗教思想も文学もあり、これらは何れも尊重すべきであるが、大和文華館の事業としては美術および工芸に集中することがもっとも効果が挙げると信じる……。大和文華館の貢献は将来多方面に亘るに相違ないが、種田さんも私も最も重要視したのは、先ず以ってその世界的貢献ということであり、然るに世界の人々が

一目見てその美に触れることができるのは、美術および工芸に違いない」と記した後、矢代幸雄氏は更に進んで「工芸の名品を収集し展示することは、決して単に美しいものを見せるだけの閑事業ではなく……。もっと切実に、社会の生産的必要にまで貢献するところがある、と信ずるのであります」と述べ、日本の将来が工芸の製作とその輸出にあり、そのための実物教育の場として大和文華館を役立てたい、としているのであります。そして「かくのごとく私が大和文華館を、美術館であるにも拘わらず、単に回顧的な歴史研究や美術鑑賞のための機関とのみ考えず、もっと能動的に観光事業の上にも、工芸製作の上にも活用させようと構想していたことは、種田さんにとってはむしろ思いがけなかったようで、非常に喜んでくれたのであります」と述べられております。

矢代氏自身記しているように、この殖産興業という言い方は古く、今日からすれば時代錯誤の概念と見えるかも知れません。しかしこの〈工芸〉を〈手の技〉あるいは広く〈技術〉と読み換えるなら、この思想は現在でも立派に生きている、ということができましよう。我田引水になりますが、昨春来、本誌の館長就任挨拶文や、秋の特別展オープニングのご挨拶において、

友の会会員や美術愛好家の皆様に加えて、奈良や大阪・京都のとりわけ職人の皆様ないし技術者の方々にご来館を呼びかけたのも、正に同じ理由からでした。種田・矢代コンビが掲げた大和文華館設立の趣旨は、今後とも我々の目標であり続けると信じて疑いません。

種田氏と矢代氏が語らった第三の夢は、大和文華館を自然美と芸術美を兼ね備えた設備にしたいということでした。人工照明を完備した美術館より、自然光だけで採光する環境重視型の美術館、といった考え方が最近でこそ注目されはじめましたが、種田・矢代両氏はここでもまたそれを半世紀先取って検討していたということができましよう。そしてこの夢をば、蛙股池という景勝の地と吉田五十八という天才建築家の技を得て実現したのが、近鉄中興の祖、佐伯勇氏であります。昭和35年10月のことであります。

本年ここに開館40周年を迎えるに当たり、こうした先人の志を受け継ぎ、微力ながら当美術館の文化的使命の達成に向け一丸となつて力を傾注して参りたく、今後とも一層のご支援を賜りますようお願い申し上げます。

季刊 美のたより No.131

平成12年4月27日

発行 大和文華館